

マリ観光

平成21年6月
在マリ日本国大使館

マリは、4世紀のガーナ王国にはじまり、マリ帝国、ソンガイ帝国の歴史を経ながら文明の発祥地となり、現代に至るまで伝統や文化を継承してきました。数多く残る史跡の内、ユネスコ世界遺産として登録され

た場所には、アフリカ有数の異色な文化として、毎年多数の観光客が訪れます。

その一つが、「ジェンネの旧市街」です。首都から約600キロ北東に位置するこの街には、紀元前250年頃から人が住み始めたと言われ、黄金のサハラ交易として重要な役割を果たしました。1200年頃イスラム教の影響を受け、泥の大モスク（横75m×高さ20m）が建設され、イスラム教普及の中心地となりました。1907年に再建された大モスクの建物はスーダン建築様式として知られ、毎年4、5月頃、泥職人により手作業で泥が塗り変えられます。

もう一つ、ジェンネから東に約125キロ離れたところに、「バンディアガラの断崖」があります。高さ300～600、1,155メートルの断崖に沿って、ドゴン族の村が積み上がるように広がっています。この村は、ジェンネと違い、イスラム教など宗教や価値観に左右されず、独自の哲学とアニミズムに基づき「一つの世界」として築き上げられ、現在もその伝統的価値が守られています。ドゴン族の仮面踊りは神秘的で、2、3年に一度のダマ祭りは、死者の魂を祭ることにより死者は先祖になれると伝えられ、また、60年に一度のシギ祭り（次は2027年予定）は、死者の霊を祝います。

金と綿の生産地で有名であり、特に、紙のように薄く丈夫で上質なバザン布や泥染めのボゴラン布を買い、職人にデザインを頼むと世界に一品しかない思い出の衣服を作ることができます。

マリの人と自然の神秘に触れると、生きることの価値、隣人の大切さ、自然の偉大さについてあらためて考える機会を与えてくれるでしょう。



「ジェンネの旧市街」泥の大モスク。梯子をかけ、今年の泥の塗り替え準備を行う。



「パンディアガラの断崖」。村が崖に寄り添うように立っている。

[渡航情報](#)